

## 第1回三浦市いじめ等に関する調査委員会議概要報告

日 時 令和2年9月1日(火)  
午後6時00分から午後7時  
場 所 三浦市教育委員会教育委員室

出席者	稲田 裕一郎 委員、北川 年一 委員、山田 文紀 委員、 小田 桂子委員、小林 正稔 委員
欠席者	なし
教育委員会	及川教育長
事務局	君島教育部長、高梨学校教育課長、増田指導主事、荒井指導主事

### 1 開会

増田指導主事により開会

### 2 調査委員の委嘱

5名の委員に教育長から委嘱書が交付された。

### 3 教育長あいさつ

及川教育長よりあいさつが行われた。

### 4 委員長、副委員長選出

条例第12条により、委員の互選によって小林委員を委員長に選出

条例第12条により、委員長の指名によって北川委員を副委員長に選出

### 5 委員長挨拶

小林委員長からあいさつが行われた。

北川副委員長からあいさつが行われた。

### 6 諮問

いじめ防止のための実効的な対策について諮問された。

### 7 協議

小林委員長：いじめ防止のための点検表について、実施したことにより「うちの学校はできている」と思い込んでいるほうが怖い。

稲田委員：ある程度の役職の人が回答すると、自分の学校を批判的には評価しない。アンケートのやり方については考えてもいいと思う。

小林委員長：三浦市は職員全員でアンケートをやってもいいのではないかと。インタビュー効果が期待できる。いじめの実態は少数だけど、先生方の意識が高くなる。先生たちが1学期に1回くらいやってもいいのではないかと。することで、子どもたちに大人が見ていることを大人として示す方法の1つになる。つまり、いじめの件数が1件もないからいじめがないということではない。いじめをしている人はいじめをしていると認識している場合は少ない。個人的には正義だと思ってやって、結果として相手を傷つけていることがある。個人主義的な正義は支配に繋がり、良いことはない。自分と相手がどういう関係かを気づいてもらうためにもアンケートをそういう使い方をして欲しい。

小林委員長：先生がアンケートに対して、「こんなものつけさせて、腹が立つ」と思ってくれるのもいい。アンケートをつけることで、たえず、いじめはあるんだ、人と人が一緒にいればトラブルが起こるものだ、どっちが正しいというのではなく、互いに譲り合い、認め合う中で、満足しなくても不満ではない、妥協点を見つけれられていくことが大事ということが伝わっていけばよい。私はこれをハーモニーポイントという言葉を使っている。前回北川先生がおっしゃった「ハートフルな三浦市」にも繋がる。

小林委員長：今コロナ禍で使われている「ソーシャルディスタンス」という言葉。あれは心理学をやっている立場からすると心外である。社会的な距離、社会性を入れると心も離れていくことになってしまう。本来は「フィジカルディスタンス」であろう。体の距離は離れても、心の距離は離れなくてもいい。教育現場でしっかり教えてほしい。親元を離れて暮らしていても、心が離れていないと思うこと。一人になっても思い出があれば心を温かくしてくれること。そういうことだと思う。

山田委員：素晴らしい話。ソーシャルディスタンスはおかしい。アンケートは主観的な表現よりも、わかりやすい方がよい。具体的に指導していることを聞くとどうか。やっているかどうかで評価は下がると思う。

小林委員長：支配と指導を間違えてはいけない。「持たせているか」は支配的、「持たせるように教えているか」は指導であろう。支配して服従させることが教育ではなく、考えさせることが教育。職員向けのアンケートの文章もそのように考えてほしい。

小田委員：児童生徒向けの実態把握のためのアンケートについて、実施方法について各校に差があるんだと感じた。やり方をそろえた方が、正確性が出るのではと思った。

小林委員長：多くとることによって、いろんな意味で先生方に注意喚起するのか、回数を少なくすると深刻さが薄くなることもある。県のアンケートに不登校を数字で挙げる欄があるが、市町によっては不登校より病欠の方が多くなっていると言ったことがあった。統計の取り方でアンケートが変わってしまう。平成

30年度からはちょっとでも気になると不登校の数として挙げるよう変わった。出したことで数は多くなったが、その分深刻化することを減らせていると感じている。統計の使い方を教育委員会が理解して使うべきであろう。現場の先生方が「ちょっとおかしい」と気づき、意識することが大事。三浦市はフットワークが良いSCやSSWがいるからいいが、何かができるのではなく、そばで寄り添っていることが良い。それが専門職で大事な視点だと思う。「これからの学校ではSSWが働きやすい学校環境を作らなければいけない」という人がいた。これは本末転倒である。学校の先生に委縮してほしくない。子どもも委縮してしまう。そのバランスという意味合いが地域によって差があってもいい。専門職の先生方もそれに合わせることでよい。子どもたちを育てることは楽しいことだと伝えていくことがこれから必要なこと。

北川副委員長：客観的なデータを得るには、一人ひとりの教員が回答してビックデータとしていく方が良い。非行なども、どんどんデータ化していくことで、他市町との比較をして傾向をつかむことができる。公表して仕組みを作ることができる。ビックデータを作っていく方が良いと思う。

小林委員長：情報を有機物にしようとしている。本来は無機質的なもので、人間が有機物に変えている。県の調査は問題あるが、先生方が全員で見ても管理職も含めて判断していく材料にするデータにすることが大事。

委員一同 賛同

8 その他  
特になし

9 閉会